

家族それぞれの『がんばりや』

カネディアン・アカデミー 高等部一年 庄 舞子

同じ言葉でも、それを発する人と受け取る人との関係、環境、状況によって、それぞれに意味は大きく変わる。ある人には、ただの文字通りの単語であって、それ以上の意味はないかもしれない。人にはそれぞれ固有の経験があり、言葉に対する独特の感情や解釈の仕方を持っている。私にとって意味のある言葉は何かと考える時、小さい頃から何度も聞いている、家族からの「がんばりや」という励ましの言葉を思いつく。この短いたった五文字の言葉でも、それを発する人によって意味が変わり、それを聞く私の気持ちも微妙に変わる。

昔から、私を学校に送り出す時、家族の皆は明るい表情で「舞子、がんばりや」と言ってくれる。私は大家族の中で育ち、幼い頃から最強の応援団に囲まれている。そして、この応援団それぞれの言葉から、一人一人の心のこもったメッセージが伝わる。母方の祖母は、働く母親に代わって、私を小さい時から一番近くで見守り、いつも優しく、時に厳しくしつけ育ててきてくれた。その祖母の「がんばりや」を聞くと、「きちんとした生活をしなさい。一つ一つのことを丁寧に。」という、いつもの祖母からの注意を思い出す。母方の祖父は、幼い頃から、遠方の学校に通う私を、最寄りの駅まで毎日車で送り迎えしてくれていた。学校帰りの私の疲れた顔も、悲しい顔も、嬉しいことがあった時の満面の笑みも、家族の中で一番最初に見てきた人だ。祖父の「がんばりや」は、「身体に気をつけて、元気だな。」という言葉に聞こえる。父方の祖母は、穏やかな人で、母親に叱られている時なども、いつも味方になり、私をかばってくれた。その祖母の「がんばりや」を聞くと、がんばってと言いつつ、本当は、「無理せず、頑張りすぎなや。」と心配してくれているのだとを感じる。父親の「がんばりや」は、「ベストを尽くして、精一杯やりなさい。舞子ならできる。」という応援のメッセージが込められているのだと思う。私が他人に見せる明るく前向きな面だけではなく、私の弱い一面や暗い感情を知る母親からの「がんばりや」は、「強くなりなさい。自分を信じて、自信を持って前に進みなさい。」という、いつもの私の背中を後押ししてくれる教えに聞こえる。十歳も年の離れた妹は、何でも私の真似をしたがる。妹にとって、年上の私は憧れの対象のようである。その幼い妹も皆と同じように「舞子、がんばりや」と時々言ってくれる。妹の「がんばりや」からは、「いつでも私の尊敬できるお姉ちゃんできてね」という気持ちを感じる。

「がんばってね」「がんばっておいで」とは、家族以外の人からも何度も言われてきたし、私を励ましてくれた人も大勢いた。だが、家族からの「がんばりや」は特別で、愛情と、私を精一杯応援してくれる気持ち、一番強く伝わる。「がんばりや」という、一見何の変哲もない短い言葉から、心にまっすぐ届くメッセージを感じることができるのは、これまでに家族と長い時間を共に過ごし、多くの会話を交わし、強い絆で結ばれているからだと思う。大家族の生活は、時には煩わしいこともあるが、何層もの厚いベールにくるまれたような絶対的な安心感がある。家を出るときの私の気分は、日によってそれぞれだが、この温かい家族の声援を聞くと、いつもの自分を思い出し、穏やかな気持ちになることができる。家族それぞれからの「がんばりや」が、

これまでどれだけ私を励まし、勇気づけてくれたかは、計り知れない。

言葉とは、人と人をつなぐ大切な道具であるが、それを発する人の感情や願い、またそれを受け取る人の経験や状態、お互いの関係性によって、微妙に、時に大きく変貌する、扱いの難しい生き物のようでもある。私も、祖父母や両親のように、家族だけでなく他人にも、その時々のを射た、心のこもった日本語を発することができる人間になりたいと思う。